

林羅山『歌行露雪』について

富 嘉 吟

『歌行露雪』（内閣文庫蔵）一冊は林羅山の手稿本であり、彼が十四歳の時に英甫永雄に「長恨歌」・「琵琶行」の講義を受けて作成した注解書である。小論は『歌行露雪』の成立について探究し、羅山の白詩受容について検討してみたい。

一、『歌行露雪』の成立背景及び英甫永雄の白居易受容

1、『歌行露雪』の成立背景

『歌行露雪』の「長恨歌」と「琵琶行」の間には、師の英甫永雄が撰した本書の序文に相當する以下引用の一文（以下、「永雄序」と略称）が挿入されている。

佗力門下之家有少年、其名謂又三郎。去歲之春、十有三歲、而入吾東山、遊於大統庵裏、先于孔丘之治學者二歲。今茲冬之仲、又君袖一書來、以見示予。予開而管窺之、長恨歌之露抄也。予問云、是何人之所抄乎。又君答曰、去秋入和尚之講席、自聽之。爾來本于此、以書之出矣。熟視者、如于回明皇樂盡哀來之起本・玉妃生前沒後之事跡・祿兒反相・方士幻術、各無所欠。加之文字反切之例・義意深

密之理、悉現于筆端鼓舞者、妙中得妙、奇外呈奇者也。而今君之所抄之事歷等、皆非先是予之所講之謬說。寔後生可畏者、其斯之謂乎。昔堯夫十四歲而作明妃引、與今又君十四歲而抄玉妃傳、可謂異曲同工。戲賦唐律一篇以褒焉云。

年少揮毫憐馬嵬

露抄雪纂最奇哉

羨看子学作他力

長恨吾徒無此才

文祿第五仲冬日 前南禪永雄

（佗力門下之家に少年有り、其の名は又三郎と謂う。去歲の春、十有三歲、吾が東山に入り、大統庵の裏に遊す。孔丘の治学に先ずること二歲。今茲の冬の仲、又君一書を袖して來たり、以て予に示さる。予開きて之を管窺するに、長恨歌の露抄なり。予問いて云く、是れ何の人の抄する所やと。又君答えて曰く、去秋和尚の講席に入り、自ら之を聴く。爾來此に本づき、以て之を書き出すと。熟視すれば、明皇の樂盡哀來の起本・玉妃の生前沒後之事跡・祿兒の反相・

方士の幻術を回する如し、各おの欠く所無し。しかのみならず、文字反切の例・義意深密の理、悉く筆端に現れて鼓舞する者、妙中に妙を得、奇外に奇を呈する者なり。而今君の抄する所の事歴、皆是より先に予の講ずる所の謬説を非とす。寔に後生長るべき者とは、其れこの謂いか。昔堯夫十四歳にして明妃引を作り、今又君十四歳にして玉妃傳を抄すると、異曲同工と謂うべし。戯れに唐律一篇を賦して以て焉を褒むると云う。

年少揮毫して馬嵬を憐れみ

露抄雪纂最も奇なるかな

羨み見る、子の学他力を作すと

長く恨む、吾が徒此の才無きを

文禄第五仲冬日 前南禅永雄

と見える。この一文は英甫永雄『倒痴集』⁽¹⁾にも収録されているが、少し文字の相違がある。筆跡からみれば、永雄序は羅山の傳録ではなく、永雄が自ら加筆したものである。⁽²⁾また、林鷲峰『西風淚露』(内閣文庫本)は、『歌行露雪』の撰述の経緯について次のように述べている。

歴一兩年、聞講「長恨歌」「琵琶行」、為之抄解、號『歌行露雪』。其所引典故甚詳、師見之問曰、何處求書、考其典故哉。答曰、師之藏書、余盡見了。師異之、自是每考事必聞其出處。

(一兩年を歴て、「長恨歌」「琵琶行」を講ずるを聞き、之が抄解を為し、『歌行露雪』と號す。其の引く所の典故は甚だ詳しく、師は之を見て問いて曰く、何處にか書を求め、其の典故を考うると。

答えて曰く、師の藏書、余は盡く見了わんぬと。師は之を異とし、是れより事を考うる毎に、必ず其の出處を聞く。

この「師」は、言うまでもなく英甫永雄を指している。

英甫永雄は安土桃山時代の禪僧であり、文禄三年(1594)南禅寺の公帖を受けたが、入寺しておらず、年二回のペースで建仁寺の再任を繰り返していた。⁽⁴⁾永雄序によれば、彼が「長恨歌」「琵琶行」の講義を行ったのは、文禄四年(1595)の秋以降、建仁寺に移住した後であり、⁽⁵⁾『歌行露雪』の序を記したのは「文禄第五仲冬日」である。従って、林羅山『歌行露雪』の作成は、概ね文禄四年の後半から文禄五年(1596)の慶長に改元した前の冬までの間である。

永雄序によれば、彼は羅山が自分の講義に参加したことや、歌行の注釋を作ったことにあまり注意を拂わなかった(「予問云、是何人之所抄乎」。しかし、羅山が『歌行露雪』に引用した故事や典據は、彼の講義を越えた内容、ないし誤りを修訂した内容もたくさん存在している(「皆非先是予之所講之謬説」。永雄の稱贊は幼少期の羅山の学業を勸弊するために、多少の溢譽の嫌いがあるが、『歌行露雪』の作成については、羅山が英甫永雄の助手に過ぎないと言ひより、⁽⁶⁾彼が永雄の講義を受けた上、一部の新たな注釋を加えたと言ったほうがより妥當であろう。

英甫永雄の「唐律一篇」にいう「露抄雪纂」の一語は宋の葉適『水心集』卷二五「宋庾父墓誌銘」に見られ、⁽⁷⁾宋以来の熟語であることが分かる。『歌行露雪』の外題には「歌行露雪」四字が書かれているが、冒頭部には書名が書かれていないので、羅山が書写した當時、まだ名

付けられておらず、永雄序にある「露抄雪纂」の語から取って始めて名付けたと考えられる。

2、英甫永雄の白居易受容

英甫永雄は五山文學の中で狂歌作者として名高いが、狂歌にとどまらず、彼は「中院通勝の主催する中院月次会にたびたび出席して、當座の和歌題で漢詩を作るなど、和文學との交渉も深かった⁸⁾」という。建仁寺兩足院所藏の『倒痴集』は永雄の漢詩文集であり、彼が高度な漢詩文制作の能力を有したことを示している。前述の永雄序を除き、『倒痴集』において『白氏文集』中の表現を用いた作品や白居易の事迹に關連する作品を次に抄出して見よう。

①芙蓉滴露始開時、赫々陽烏出海來。花影涵紅似紅日、液池疑是變咸池。(「初日芙蓉」)

〔『白氏文集』卷一二「長恨歌」(0596)、「歸來池苑皆依舊太液芙蓉未央柳。」〕

②紅粧解語掖池上、似待春寒賜浴時。(「臘底荷花」)

〔『白氏文集』卷一二「長恨歌」(0596)、「春寒賜浴華清池、温泉水滑洗凝脂。」〕

③楓葉荻花落盡時、庭前菊有折殘枝。(「殘菊」)

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」(0603)、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」〕

④熒熒淡照似霜月、空屋梁間燕子樓。(「螢入燕巢」)

〔『白氏文集』卷二五「燕子樓三首及序」(0859—0862)〕

⑤可憐山鹿來遊戯、石火光中寄汝身。

〔『白氏文集』卷五六「對酒五首」その二(2677)、「蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身。」〕

⑥夢亦潯陽江上客、葉色夜送荻州秋。(「荻聲驚夢」)

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」(0603)、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」〕

⑦幽咽暗泉盈耳清、終宵入枕嬾涼生。(「泉聲來枕」)

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」(0603)、「間關鶯語花底滑、幽咽泉流冰下難。」〕

⑧潯陽旅客夢應懶、瑟瑟颼颼葉初戰。(「荻風」)

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」(0603)、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」〕

⑨不向潯陽江上生、和涓涓澗水流鳴。

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」(0603)、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」〕

⑩知是天公共吾惜、秋來只為一輪長。(「月斜天未明」)

〔『白氏文集』卷一五「燕子樓三首並序」その一(0860)、「燕子樓中霜月夜、秋來只為一人長。」また、卷一四「涼夜有懷」(0751)、「燈盡夢初罷、月斜天未明。」〕

⑪月照青苔地(句題)

〔『白氏文集』卷一四「秋思」(0752)、「鳥棲紅葉樹、月照青苔地。」〕

⑫杜鵑聲似哭(句題)

〔『白氏文集』巻一一「江上送客」(0540)、「杜鵑声似哭、湘竹斑如血。」〕

⑬ 樂天四十六新正、嗜酒賦詩慰老生。令我同中還有異、未曾一臥醉江城。(試觚、我今四十六、哀醉臥江城。樂天。)

〔『白氏文集』巻七「題舊寫真圖」(0325)、「我今四十六、衰頽臥江城。」ただし、『倒痾集』は「頽」を「醉」に作る。〕

⑭ 一叢風戰小庭側、移得潯陽索素秋。(幽居荻)

〔『白氏文集』巻一二「琵琶引」(0603)、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索素。」〕

⑮ 被單殘臘夜寒天、挑盡孤燈何肯眠。(夜寒無夢)

〔『白氏文集』巻一二「長恨歌」(0596)、「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠。」〕

⑯ 鳥郊韓柳冠詩人、後至元和變體新。(又代廣上可)

〔『白氏文集』巻五三「余思未盡加為六韻重寄微之」(2319)、「制從長慶辭高古、詩到元和體變新。」〕

⑰ 彼美西方菊光佛、彩雲易散十三餘。(杭州蘇小十三テ死タソ彩雲易散琉璃脆妍如蘇小十三余トアルト也又奏舞陽十三テ死タソ)

〔木勻菊圃十三〕

〔『白氏文集』巻一二「簡簡吟」(0604)、「大都好物不堅牢、彩雲易散琉璃脆。」〕

⑱ 「追悼月秀正貞信女助宗賢哀」、聞説別離傷暮齡、淚兼霖雨共難停。孤燈挑盡焦思處、定似明星夕殿螢。

〔『白氏文集』巻一二「長恨歌」(0596)、「夕殿螢飛思悄然、

孤燈挑盡未成眠。」〕

上記の例によれば、英甫永雄は白居易及び『白氏文集』をよく心得ており、白詩の表現を学んだり、白詩を句題としたりすることがよく見られる。また、白詩を評價した或いは白詩に取材した例も次のように見られる。

⑲ 桃花輕薄李花俗、春季風光元白詩。(「晚唐詩如晚春景」)

⑳ 「値修月妙善大姐小斂幾書卒都婆」、修善奉行還會座、鳥窠答處是諸訛。

(白居易の鳥窠問答に取材する。)

五山文學における白居易の受容については、「李杜坡谷にくらべて、禪林の關心の圏外に去りつつあった」と芳賀幸四郎氏が結論するが、平安時代以来、日本の文人に深く馴染まれた白氏詩文は、五山僧侶の創作に影響を與えないはずがないと思われる。特に「鳥窠道林との問答は五山の好箇の詩材」であり、よく彼らの禪詩に採り上げられた。永雄の「値修月妙善大姐小斂幾書卒都婆」は、鳥窠問答に取材した一例である。

修善奉行還會座、鳥窠答處是諸訛。今辰若致這般問、只對化言在月波。

と見える。鳥窠の答えが五山僧に称賛されたことが多く見られるが、永雄がそれを「是諸訛」と批判し、追悼詩の主題に應じて、白居易と鳥窠道林との問答を活用して人生の儂さを慨嘆した。

平安朝以来、日本文学に深い影響を與えてきた「長恨歌・琵琶行」にも、永雄はよく親しんでいた。「追悼月秀正貞信女助宗賢哀」を一

例として挙げてみる。

聞説別離傷暮齡、涙兼霖雨共難停。孤燈挑盡焦思處、定似明星夕殿螢。

と見える。三四句は、明らかに「長恨歌」の「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠」を撰取したものであるが、前句の「霖雨」の詩語は「長恨歌」には見当たらない。『楊太真外傳』に、

又至斜谷口、属霖雨涉旬、于棧道雨中聞鈴声隔山相應。上既悼念貴妃、因采其声為「雨霖鈴」曲、以寄恨焉。

とある。永雄の「涙兼霖雨共難停」句は『楊太真外傳』を撰取したであろう。これは永雄が「長恨歌」の表現を襲用した時、その本文にとどまらず、関連する典拠も注意していたことを表している。「五山文學」では『史記』『漢書』や杜詩・蘇詩など、多くの抄物が著されたが、白詩抄は残念ながら管見に入らない」と蔭木英雄氏が述べるが、英甫永雄が講義した「長恨歌」「琵琶行」が、羅山を啓發して『歌行露雪』になったことは、その不足を少し補うと言えよう。羅山『歌行露雪』の「夜雨聞鈴斷腸聲」句の注記にも、『楊妃外傳』の同じ段落を引用しており、永雄の講義の内容を受けたと考えられる。

二、清原宣賢抄「長恨歌・琵琶行抄」と『歌行露雪』との関連

清原宣賢が書寫した「長恨歌並琵琶行」（以下、「宣賢抄」と略称）が多く現存しており¹²、京都大學付屬圖書館清家文庫が所蔵する「長恨歌・琵琶行抄」（以下、京大本と略称¹³）はその「源流に位置する本」¹⁴

であり、「江戸期以降の「長恨歌・琵琶行」注釈において、多大な影響を與えた」¹⁵ものであると安野博之氏が論じている。また、「宣賢抄」以降に成立した『歌行露雪』は、「（京大本）の注釋と共通する部分が多く見られる」と安野氏が指摘する¹⁶。「宣賢抄」といえば、坂本龍門文庫にはもう一本（以下、龍門本と略称¹⁷）があり、同様に『歌行露雪』と関連する内容が存在している。「歌行露雪・長恨歌」の冒頭部には、

① 詩人玉屑卷第一、守法度日詩、載始末日引、體如行書日行、放情日歌、兼之曰歌行、悲如蛩蛩日吟、通俚俗日謳、委曲盡情日曲。

とあり、龍門本「宣賢抄」の「長恨歌」の末尾にも、『詩人玉屑』の同じ部分を引用している。また、『歌行露雪』の「琵琶行」の初めには、

② 白居易、字樂天、号香山居士。見長恨歌抄。

とあり、龍門本「宣賢抄」の「琵琶引」の餘白には、白居易の字號や生涯に關する内容がある。また、『歌行露雪』の「琵琶行」の同じ箇所には、

③ 引行事、見長恨歌抄。抑揚頓挫、流離沉鬱之態者、此比巴行文章之體也。是則古文真宝注者之詞也。

とある。京大本「宣賢抄」の同じ部分には、「具抑揚頓挫、流離沉鬱之態、雖千載之下、宛然琵琶哀愁之聲也」と注する。羅山が宣賢抄を機械的に写したのではなく、清原宣賢が利用した資料の来源を明らかにしたことが窺える。

また、『歌行露雪』の「琵琶行」の「杜鵑啼血猿哀鳴」句には、

④ 文選廿六、謝靈運入彭蠡湖詩、乘月聽猿、浥露馥芳葉。哀猿、見長恨抄。

と見える。京大本「宣賢抄」の「琵琶行」の同じ句には、「謝靈運哀猿啼月」と注する。ここの「長恨抄」は、「長恨歌」「琵琶行」二首の抄の併稱であると考えられる。羅山が宣賢抄から「哀猿」の典拠を提示し、『文選』から原詩の詩題及び該当部分を注記したと推測できる。ただし、『歌行露雪』の「琵琶行」の「十三学得琵琶成」句には、

⑤十八史略五、開元二年、置左右教坊。見長恨歌抄。

とあるが、京大本や龍門本「宣賢抄」ともに見当たらない。「宣賢抄」の諸本が多く存在している事實を考えれば、羅山が使ったのは京大本や龍門本に類似しているが、少し異なる一本であろう。

建仁寺兩足院の林氏は「代々清原家の門人で清原宣賢の經書詩集の抄物を多く傳承していた」⁽¹⁸⁾。英甫永雄が建仁寺の關係を通じて林氏の所蔵本を閲覧することができると思われる。また、永雄自身が「母方を通じて姻戚關係」を有した清原家とよく交際しており、「二十歳代前半の頃」から清原宣賢の息子の喜賢と知り合った。⁽¹⁹⁾天文十六年(1547)に生まれた永雄が清原宣賢に直接師事することが不可能だが、清原家に傳存されていた白氏歌行の抄物を閲覧したことはあり得る。従って、「長恨歌」「琵琶行」を講義した際に、宣賢抄本やその傳抄本を参照したことも自然である。

さらに、彼の講義を仲介として、林羅山が作った『歌行露雪』の本文及び注記は、清原宣賢の「長恨歌・琵琶行抄」とある程度の繋がりを有していると考えられる。そこで以下には、京大本・龍門本を例として、清原宣賢抄「長恨歌・琵琶行」と『歌行露雪』との關係を詳しく論じてみたい。

1、兩書の本文状況

「長恨歌」(0596)・「琵琶行」(0603)二首は古くから日本の文人に親しまれ、『白氏文集』及び選本の『古文真寶』など以外、『歌行詩』(『長恨歌伝・長恨歌・琵琶行・邪馬臺』)の單行本も編まれて盛行した。⁽²⁰⁾

京大本は『白氏文集』や單行本によらず、『古文真寶前集』巻八・九によって兩作を傳寫している。それに對し、龍門本は「古文真寶の影響を受けぬなど、本邦所傳の古い書き本である」と川瀬一馬氏が論じている。⁽²¹⁾さらに、川瀬氏が京大本「宣賢抄」について疑いを抱き、「むしろ宣賢以前に禪僧の講述したものを、宣賢が講義の參考用に手寫したものと見るべきであらう」と述べている。⁽²²⁾それに對し、國田百合子氏が「これは、室町時代から江戸時代にかけて教科書や參考書として大いに流行した『古文真寶集』の本文を採用したため」と論じている。⁽²³⁾さらに、近藤春雄氏が「(京大本)が『古文真寶』愛讀の風潮を反映したものであり、「當時、『古文真寶』の叢林の間に流行したのと關連」し、「讀者の轉變とその普及を意味するものでもあった」と述べている。⁽²⁴⁾

次に舉げる表一によれば、龍門本には舊抄本『白氏文集』の代表たる金澤本と類似する所がよく見られるが、「回頭一笑百媚生」や「排風馭氣奔如電」・「九華帳裏夢魂驚」などのように、金澤本と異なっており、京大本や『歌行露雪』・『古文真寶』と一致する所も相當存在している。これによれば、龍門本は舊抄本系統と看做されるが、京大本と同じく刊本系の影響を受けており、京大本は單に禪僧の講述したも

のを手寫した本ではないと考えられる。そこで、小論は川瀬一馬氏の説を採らず、國田百合子・近藤春雄兩氏の結論を是とする。

『歌行露雪』の「長恨歌」の篇目には「古文真寶前集第八卷載之」と注記されており、「琵琶行」には「古文真寶前集九卷有之」と注記されていることから見れば、羅山が『歌行露雪』の作成に採用した「長恨歌」「琵琶行」は、京大本と同じように『古文真寶前集』によって

いることが窺える。それは禪林の風潮、特に英甫永雄に影響されていると思われる。ただし、下にあげた表一によれば、『歌行露雪』の本文は『古文真寶』及び京大本・龍門本「宣賢抄」と概ね一致しているが、異なる箇所も見える。それは羅山が「長恨歌」「琵琶行」を抄寫した際に、他本によって改変したからであろう。

表一 「長恨歌」「琵琶行」異文表

*本表は宮内庁書陵部所蔵の那波本『白氏文集』の本文を採り、『歌行露雪』及び異文注・大英圖書館所蔵南北朝刊本『魁本大字諸儒箋解古文真寶前集』・京大本「宣賢抄」・龍門本「宣賢抄」・『和刻本漢詩集成』本『歌行詩』・金澤本『白氏文集』所収の「長恨歌」「琵琶行」を用いて校勘した異文表である。

那波本		『歌行露雪』・注記	『古文真寶』	長恨歌		『宣賢抄』・注記	『歌行詩』	金澤本
御宇多年求不得	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○○	龍門本 ○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○寓○○○○○○○
養在深閨人未識	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○○	龍門本 ○○○○○○○○	○○○窓○○○○	○○○○○○○○	○○○窓○○○○
回眸一笑百媚生	○頭○○○○○○○ 頭字、文集作眸。	○頭○○○○○○○	○頭○○○○○○○	京大本 ○頭○○○○○○○	龍門本 ○頭○○○○○○○	○頭○○○○○○○	○頭○○○○○○○	○○○○○○○○○

那波本	『歌行露雪』・注記	『古文真寶』	「宣賢抄」・注記	『歌行詩』	金澤本
春風桃李花開夜	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 龍門本 ○○○○○○○ 日	○○○○○○○ 日／夜	○○○○○○○ 日
秋雨梧桐葉落時	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 龍門本 ○○○○○○○	○ 雨／露 ○○○○○○○	○○○○○○○
西宮南苑多秋草	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 龍門本 ○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○ 内○○○○
宮葉滿階紅不掃	○○○○○○○○	○○○○○○○○	落 龍門本 ○○○○○○○ 京大本 ○○○○○○○	落／宮 ○○○○○○○	○ (落) ²⁶ ○○○○○○○
椒房阿監青娥老	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 龍門本 ○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○ 蛾○○
孤燈挑盡未成眠	○○○○○○○○	○○○○○○○○	秋 龍門本 ○○○○○○○ 京大本 ○○○○○○○	○○○○○ 能○	秋 ○○○○○○○
遲遲鐘鼓初長夜	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 鼓、漏ノ。 龍門本 ○○○○○○○	○○○○○ 漏○○○	○○○○○ 漏○○○

山在虛無縹緲間	排空馭氣奔如電	能以精誠致魂魄	臨邛道士鴻都客	翡翠衾寒誰與共	鴛鴦瓦冷霜華重	那波本
○○○○○○○○	○風○○○○○○ 風、文集作空。	○○○神○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○花	『歌行露雪』・注記
○○○○○○○○	○風○○○○○○	○○○神○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	『古文真寶』
○龍門本 ○○○○○○○○	○龍門本 ○風○○○○○○	○龍門本 ○神○○○○○○	○龍門本 ○○○○○○○○	○龍門本 舊枕故衾○○○○	○龍門本 ○○○○○○○○	「宣賢抄」・注記
○○○○○○○○	○風○○○○○○	○○○神○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	『歌行詩』
○○○○○○○眇	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○方○○○○	舊枕故衾○○○○	○○○○○○○○花	金澤本

玉容寂寞淚攔干	風吹仙袂飄飄舉	雲鬢半垂新睡覺	九華帳裏夢中驚	中有一人字玉真	其中綽約多仙子	樓閣玲瓏五雲起	那波本
○○○○○欄○	○○○○○飄○	○○○偏○○○ 偏、文集作垂。	○○○○○魂○ 魂、文集作中。	○○○○○	○○○○○	○殿○○○○○	『歌行露雪』・注記
○○○○○欄○	○○○○○飄○	○○○偏○○○	○○○○○魂○	○○○○○	○○○○○	○殿○○○○○	『古文真寶』
○龍門本 ○○○○○欄○	○龍門本 ○○○○○飄○	○龍門本 ○○○偏○○○	○龍門本 ○花○○○○○魂○	○龍門本 ○○○○○	○龍門本 ○○○○○	○龍門本 ○○○○○	「宣賢抄」・注記
○○○○○欄○	○○○○○飄○	○○○偏○○○	○○○○○魂○	○○○○○	○○○○○	○殿○○○○○	『歌行詩』
○○○○○欄○	○○○○○	○○○偏○○○	○花○○○○○	○○○○○名○妃	○上○○○○○	○殿○○○○○	金澤本

序			詩題 琵琶引		此恨綿綿無盡期	但令心似金鈿堅	那波本
舟船中	送客溢浦口	元和十年					『歌行露雪』・注記
○○○	○○至○○	○○○五○秋 文集無秋字。	○○行		○○○○○絶○ 絶期、文集作盡期。	○○○○○○○	
○○○	○○○○○	○○○○○	○○行		○○○○○絶○	○○○○○○○	『古文真寶』
○龍門本 ○京大本 ○○○	○龍門本 ○京大本 ○○○○○	○龍門本 ○京大本 ○○○○○	○龍門本 ○京大本 ○○○行	琵琶行	○龍門本 ○京大本 ○○○○○絶○	○龍門本 ○京大本 ○○○○○	「宣賢抄」・注記
○○○	○○至○○	○○○五○秋	○○行		○○○○○	○○○○○○○	『歌行詩』
舟中	○○至○○	○○○五○秋	○○○		○○○○○絶○	○教○○○○○	金澤本

那波本	歌行露雪・注記	『真宝』	宣賢抄・注記	『歌行詩』	金沢本
繞船月明江水寒	○○明月○○○ 明月、文集作月明。	○○明月○○○	京大本 ○○明月○○○ 龍門本 ○○明月○○○	○○明月○○○	○○○○○○○○○
夢啼粧淚紅闌干	○○○○○欄○	○○○○○欄○	京大本 ○○○○○欄○ 龍門本 ○○○○○欄○	○○○○○欄○	○○○○○○○○○
相逢何必曾相識	○○○○○○○	○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 龍門本 ○○○○○○○	○○○○○○○	○悲○○○○○
謫居臥病潯陽城	○○○○○○○	○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 龍門本 ○○○○○○○	○○○○○○○	○○病臥○○○
潯陽小處無音樂	○○地僻○○○ 地僻、事文作小處、 文集亦同。	○○地僻○○○	京大本 ○○地僻○○○ 龍門本 ○○地僻○○○	○○地僻○○○	○○○○○○○○○
住近湓江地低濕	○○○○○○○ 事文、江作池。	○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 龍門本 ○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○○○
杜鵑啼血猿哀鳴	○○○○○○○ 事文、啼血作啼哭。	○○○○○○○	京大本 ○○○○○○○ 龍門本 ○○○○○○○	○○○○○○○	○○○哭○○○

那波本	歌行露雪・注記	『真宝』	宣賢抄・注記	『歌行詩』	金沢本
春江花朝秋月夜	○○○○○○○○	無し。	京大本 無し。 龍門本 ○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○
往往取酒還獨傾	○○○○○○○○	無し。	京大本 無し。 龍門本 ○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○
嘔啞嘲晰難為聽	○○○○□○○○ 嘲□、當作啞晰、事 文如此。	○○啞○○○○	京大本 ○○啞○○○○ 龍門本 ○○啞○○○○	○○啞○○○○	□○○○○○○○
滿座重聞皆掩泣	○○聞之○○○ 事文作重聞、文集亦 如此。	○○聞之○○○	京大本 ○○聞之○○○ 龍門本 ○○聞之○○○	○○聞之○○○	○○○○○○○○

2、兩本の注解状況

本文以外、『歌行露雪』の注釋にはしばしば「本注」を引用しているが、大英圖書館所藏の南北朝刊本『魁本大字諸儒箋解古文真寶前集』（以下、『箋解』と略称）と對照してみれば、すべて『箋解』の内容を抄録したものである。羅山が『古文真寶』から『歌行露雪』を書寫した際に、同時にその注釋を利用したからこそ、『箋解』の内容を「本注」と略稱したと考えられる。

龍門本「宣賢抄」には『箋解』による注釋はあまり見られないが、表二によれば、京大本「宣賢抄」の注記には『箋解』によって注記した内容が相當存在している。さらに、『箋解』の「琵琶行」の「夜深忽夢少年事」「我聞琵琶已歎息」二聯には注釋があるが、京大本・『歌行露雪』ともに引用されていない。それは羅山が『箋解』を引用した際に、京大本系統の「宣賢抄」に影響を受け、この本に引用されている部分だけを抄録していたからであろう。

表二 「宣賢抄」の注記と『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』注釈との関連

白詩原文	京大本「宣賢抄」	『歌行露雪』	『古文真宝』注
漢皇重色思傾國 御宇多年求不得	明皇思得傾城美貌之婦、不敢斥言唐君、借漢為喩。	同。	同。
楊家有女初長成 養在深閨人未識	楊玄琰女、小字玉環。	同。	同。
天生麗質難自棄 一朝選在君王側	開元十一年歸于壽邸、為壽王妃、(後略)。	同。	同。
春寒賜浴華清池 溫泉水滑洗凝脂	三秦記、始皇至驪山與神女遊、(後略)。明皇雜錄、天寶六載、更溫泉曰華清宮湯、(後略)。	同。	同。
雲鬢花顏金步搖 芙蓉帳暖度春宵	假名注、『禮記・明堂位』を引用する。	記、明堂位注、副首飾也。今歩搖是也。	同。
遂令天下父母心 不重生男重生女	杜詩、生女猶可嫁比鄰、生男埋沒隨百草。	同。	同。
漁陽鞞鼓動地來 驚破霓裳羽衣曲	天寶十四載、祿山卒、藩兵十餘萬起漁陽、(後略)。	同。	同。
翠華搖搖行復止 西出都門百餘里	玄宗幸蜀、軍次馬嵬驛。將士飢疲、皆憤怒、(後略)。	同。	同。
六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死		同。	同。
峨嵋山下少人行 旌旗無光日色薄	峨眉、成都府山名。	同。	同。
馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死處	嵬、五回反。	同。	同。

長恨歌

白詩原文	京大本「宣賢抄」	『歌行露雪』	『古文真宝』注
芙蓉如面柳如眉 對此如何不淚垂 春風桃李花開夜 秋雨梧桐葉落時	見芙蓉則思貴妃之面、見柳則思貴妃之眉。春風花開艷陽之辰、秋雨葉落淒涼之際。對比景物、使人傷悲。	同。	同。
梨園弟子白髮新 椒房阿監青娥老	唐・禮樂志、初隋有法曲、(後略)。漢官儀、皇后稱椒房、(後略)。阿音握。	同。	同。
臨邛道士鴻都客 能以精神致魂魄	道士姓楊名通幽。	同。	同。
中有一人字玉真 雪膚花貌參差是	玉真、乃貴妃也。參、初令反。美、楚宜反。	同。	同。
七月七日長生殿 夜半無人私語時	長生、唐殿名。天寶十載、明皇憑楊妃肩、(後略)。	同。	同。
在天願作比翼鳥 在地願為連理枝	鳥各一羽、相比而飛、為比翼鳥。樹一枝、相向連接脈理而生、(後略)。	同。	同。
天長地久有時盡 此恨綿綿無絕期	觀天長地久、此恨綿綿之句、則其命名之意可知矣。	同。	同。
琵琶行			
潯陽江頭夜送客 楓葉荻花秋瑟瑟	潯陽、江州郡名。劉禹錫詩、兩岸蕭蕭蘆荻秋。	同。	同。
轉軸撥弦三兩聲 未成曲調先有情	釋名、琵琶本胡中馬上所鼓也。推手前曰琵琶、引手卻曰琵琶。	同。	同。
輕攏慢捻抹復挑 初為霓裳后六么	樂譜琵琶曲、有轉圓、六么、獲索、梁州、皆其名也。	同。	同。
曲罷常教善才服 妝成每被秋娘妒	高齋詩話、元和中、曹保有子善才、善才有子綱、皆執琵琶。	同。	同。
五陵年少爭纏頭 一曲紅綃不知數	唐王元寶富而無學、嘗會賓數日、人問必多佳論。元寶曰、但費錦纏頭耳。注、賜歌舞者利物也。	同。	同。

白詩原文	京大本「宣賢抄」	『歌行露雪』	『古文真宝』注
商人重利輕別離 前月浮梁買茶去 夜深忽夢少年事 夢啼妝淚紅闌幹	饒州浮梁縣、乃產茶之地。	同。	同。 長恨歌、玉容寂寞淚闌 幹。以上系商人婦所訴也。
我聞琵琶已歎息 又聞此語重唧唧	(引用無し。)	(引用無し。)	已下乃司馬答商婦。
其間且暮聞何物 杜鵑啼血猿哀鳴	公詩、聲聲啼血向花枝。謝靈運、哀怨啼月。	羅鄴詩、聲聲啼血向花 枝。又謝靈運云、哀猿啼月。 (中略) 哀猿、見長恨抄。	同。
豈無山歌與村笛 嘔啞嘲哳難為聽	嘔、音毆。啞、音癒。啞、音嘲。哳、陟轄切。言其聲韻 粗俗也。	同。	同。
就中泣下誰最多 江州司馬青衫濕	此乃白樂天自謂。前輩曾下一轉語云、惟有江州司馬淚、 如何夜半著青衫。	同。	同。

『箋解』以外、宣賢が「長恨歌」を注釋した際に、「天隱注を主体に季昌注の一部を加えた」増注本『三體詩』(以下、三體詩注と略稱)を引用している。⁽²⁷⁾『歌行露雪』にも三體詩注をよく引用しており、これは前述する『箋解』の引用と同じく宣賢抄からの影響であろう。ただし、表三によれば、京大本「宣賢抄」における三體詩注の引用は主に「長恨歌」の前文に見られるのに対し、『歌行露雪』における三體詩注の引用は京大本より多く存在している。⁽²⁸⁾鈴木健一氏『林羅山年譜稿』「文祿四年(一五九五)」には、建仁寺大統庵に入り、長老古澗慈稽に学ぶ。(後略)(年譜・行状)あるいは、この年の英雄の『三體詩』講義も聴講したか。(小高)⁽²⁹⁾とあり、それは羅山が同時に英甫永雄から『三體詩』の講義を聞いていたので、三體詩注に詳しくあったことからであろう。

表三 増注本『三體詩』との関連

白詩原文		京大本	『歌行詩』本	『三體詩』出典
長恨歌				
冒頭部前文	假名注。『三體詩』卷一・杜牧「過勤政樓」注を引用している。 假名注・漢文注混在。『三體詩』卷一・杜常「華清宮」注を引用している。	(引用無し。)	(引用無し。)	卷一、杜牧「過勤政樓」。
天生麗質難自棄 一朝選在君王側	(引用無し。)	唐史、玄宗以後宮數千、(後略)。三體詩中注。	卷二、李商隱「馬嵬」。	
春寒賜浴華清池 溫泉水滑洗凝脂	假名注。『三體詩』卷一・杜常「華清宮」注を引用している。	漢文注。円至天隱注三體詩曰、驪山溫泉宮、太宗所建、(後略)。又李昌増注、華清宮在唐關内道、(後略)。	卷一、杜常「華清宮」。	
姊妹弟兄皆列土 可憐光彩生門戶	(引用無し。)	三體詩載張祐集靈台、(中略)。天隱注、楊妃有三姨、(後略)。	卷一、張祐「集靈台」。	
驪宮高處入青雲 仙樂風飄處處聞	(引用無し。)	三體詩注、玄宗天寶元年分置會昌縣、(後略)。	卷一、顧況「宿昭應」。	
漁陽鞞鼓動地來 驚破霓裳羽衣曲	(引用無し。)	三體詩三注曰、漁陽今檀州、(後略)。 天寶十四年六月一日、華清宮為貴妃作生日、(中略)。三體注。	卷三、劉長卿「穆陵關北逢人歸漁陽」。	
九重城闕煙塵生 千乘萬騎西南行	(引用無し。)	杜常華清宮詩、(中略)。注、江南、指蜀江之南(後略)。	卷一、杜常「華清宮」。	
六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死	(引用無し。)	三體詩中、李商隱馬嵬詩、(中略)。注、唐書百官志、(中略)三體中注。	卷二、李商隱「馬嵬」。	

白詩原文	京大本	『歌行詩』本	『三體詩』出典
<p>黃埃散漫風蕭索 雲棧縈紆登劍閣</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>馬戴、送人歸蜀詩、(中略)。注、大安軍棧道連空、(中略)。三體下。 雍陶詩、(中略)。注、斜谷道至鳳州界百五十里、(中略)。三體詩上。 嚴維、送鄭有入蜀詩、(中略)。注、大劍山即劍門也、(中略)。三體下。</p>	<p>卷三、馬戴「送人歸蜀」。 卷一、雍陶「西歸出斜谷」。 卷三、嚴維「送鄭有入蜀」。</p>
<p>峨嵋山下少人行 旌旗無光日色薄</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>洞天記、峨眉山在嘉州峨眉縣、(中略)。三體下注。 崔塗、繡嶺宮詩、(中略)。注同上、三體二。 李商隱聞歌詩、(中略)。注、唐武宗疾篤、(中略)。三體二。</p>	<p>卷三、岑參「夜宿龍吼灘思峨眉隱者」。 卷二、崔塗「繡嶺宮」。 卷二、李商隱「聞歌」。</p>
<p>行宮見月傷心色 夜雨聞鈴腸斷聲</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>王建詩、(中略)。注、太平天子、謂玄宗也。三體詩。</p>	<p>卷一、王建「宮詞」。</p>
<p>天旋日轉迴龍馭 到此躊躇不能去</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>馬嵬故城在興平縣西北二十三里、(中略)。三體二注。 史云、祿山反、上出延秋門、(中略)。同注。 仙傳拾遺曰、玄宗幸蜀、(中略)。三體中注。</p>	<p>卷二、李商隱「馬嵬」。</p>
<p>馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死處</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>上陽宮詩注、郊祀志、(中略)。三體。上陽、唐宮殿名。 未央宮、高祖七年蕭何造。杜詩、杜陵韋曲未央前。同注。</p>	<p>卷一、竇庠「上陽宮」。 卷一、雍裕之「宮人斜」。</p>
<p>歸來池苑皆依舊 太液芙蓉未央柳</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>卷一・薛能「吳姬」。</p>
<p>梨園子弟白髮新 椒房阿監青娥老</p>	<p>假名注・漢文注混在。『三體詩』卷一・薛能「吳姬」注を引用している。</p>	<p>張又新詩、(中略)。注、翡翠、赤羽雀、(中略)。三體下。 朱褒、悼亡妓詩、(中略)。注、禮記、(中略)。三體。</p>	<p>卷三、張又新「三月五日汎長沙東湖」。 卷一、朱褒「悼亡妓」。</p>
<p>鴛鴦瓦冷霜華重 翡翠衾寒誰與共</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>道經云、人行大道號道士、(中略)。三體下注。 唐六典、道士修行、其德高思精、(中略)。同上注。</p>	<p>卷三、賈島「山中道士」。 卷一、鮑溶「贈楊鍊師」。</p>
<p>悠悠生死別經年 魂魄不曾來入夢</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>岑參詩、(中略)。注、杜預曰、方、法也、法術之士。三體下。</p>	<p>卷三、岑參「夜宿龍吼灘思峨眉隱者」。</p>
<p>臨邛道士鴻都客 能以精神致魂魄</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>為感君王展轉思 遂教方士殷勤覓</p>	<p>(引用無し。)</p>

白詩原文	京大本	『歌行詩』本	『三體詩』出典
中有一人字玉真 雪膚花貌參差是	(引用無し。)	李商隱馬嵬驛詩、(中略)。注、仙傳拾遺曰、楊妃死、(中略)。 三體中。	卷二、李商隱「馬嵬」。
潯陽江頭夜送客 楓葉荻花秋瑟瑟 十三学得琵琶成 名屬教坊第一部	(引用無し。)	三體詩二、皇甫冉、送李錄事赴饒州詩、(中略)。注、吳九江郡鄱陽縣本楚地、(後略)。	卷二、皇甫冉「送李錄事赴饒州」。
五陵年少爭纏頭 一曲紅綃不知數	假名注。『三體詩』卷一・吳融「閩鄉卜居」注を引用しており、出典を明記していない。	三體詩二注、元宗開元初於蓬萊宮側立教坊、置使領之。 三體詩、吳融詩、五(中略)。注、五陵、(後略)。	卷二、王建「早春五門西望」。
		三體詩、吳融詩、五(中略)。注、五陵、(後略)。	卷一・吳融「閩鄉卜居」。

琵琶行

以上の『箋解』・『三體詩』以外、京大本「宣賢抄」には『句解』を引用している。この「句解」は「どういふものかよく分からない」が、『歌行露雪』にも同じく『句解』を引用している³¹。これは京大本系統の「宣賢抄」からの影響であろう。

三、林羅山の白詩受容における『歌行露雪』及び羅山手校本『白氏文集』との関係

『歌行露雪』が英甫に奉呈されたのは慶長元年(1596)であるが、原書には後の加筆や修訂が時に見られる。「琵琶行」の冒頭部の欄外には、五年後の慶長六年(1601)六月十一日、舟橋秀賢と「司馬」の一語について検討した追記がある。

極廊秀賢告余曰、司馬者、日本ノ国守ノ下に使々掾ト云者ナリ

現存する羅山の年譜資料や舟橋秀賢が著した『慶長日件録』によれば、二人の交際に関する最も早い記載は、慶長八年(1603)のことである。鈴木健一氏『林羅山年譜稿』には、

十月二十九日、船橋(清原)秀賢を訪問する。(慶長日件録)
十一月四日、船橋秀賢が羅山宛書簡を著す。(慶長日件録)

とある。『慶長日件録』は慶長六年の部分に欠いているが、『歌行露雪』に保存されている追記によれば、二人が早くから學問的交流を始めたことが分かる。それは『歌行露雪』の研究に留まらず、羅山と舟橋秀賢との交遊関係にも貴重な資料と見做してよい。また、「長恨歌」の「天

生麗質難自棄」句の欄外には、

道春云々、開元二十一年、(不詳)、天寶四載、冊為貴妃、時年廿七、十五載、縊殺妃于馬嵬、時卅八。開元七年妃生二天寶十五載死。と見え、それは羅山が慶長十二年(1607)剃髪して名を「道春」と改めた後の追記である。さらに、「峨嵋山下少人行」句の欄外には、

考究不精。○志林、白樂天長恨歌云ノ峨嵋山下少人行、峨眉在嘉州、與幸蜀路全無交涉云々。此文章之病也。事文文別五。

と記し、昔の注釋を批判した例もある。『歌行露雪』は少年期の林羅山と『白氏文集』との關係において貴重な資料であり、生涯に亘った羅山の白詩享受の始まりと言えよう。

元和四年(1618)、羅山は弟子の那波道円から新刊本『白氏文集』を献呈され、その一部に加點・校勘した。東京國立博物館所蔵の林羅山手校本『白氏文集』(以下、東博本と略称)として傳えられており、中期の羅山の白詩享受を反映している。東博本には羅山の息子の鷺峰によって加點された部分があるが、村上雅孝氏によれば、卷十二、即ち「長恨歌」「琵琶引」が収録されている部分は羅山によって加點されたものである。従って、卷十二の行間或いは欄外の注釋も羅山のものであると考えられる。兩本を對照してみれば、羅山の白詩受容の變遷を説明することができよう。

『歌行露雪』には異文を行間や餘白に注記する所が多く存在している。それらの異文注記は、『歌行露雪』が成立した後に書き添えたものであろう。後掲の表四によれば、『歌行露雪』の傍注には「文集作某」の校記が十ヶ所見られ、それら「文集」の「某」字は元和四年(1618)

に刊行された那波本の字と同じである。羅山が元和四年「那波道円から刊行したばかりの『白氏文集』三十冊を贈られ」る前には、「新樂府」及び金澤本を中心とした『白氏文集』の「繕寫一通」のみを所持していたことを考えると、傍注の「文集作某」の校記は、『歌行露雪』が成立した二十年餘り後、那波本『白氏文集』を用いて追記したものである。恐らく元和四年、那波本に加點したと同時に、『歌行露雪』にその異文を記入したと考えられる。

また、『歌行露雪』の傍注には「事文作某」の校記が六ヶ所あり、これは『事文類聚』によって注記したものである。これらの校記が「琵琶引」の部分だけに存在しているのは、『事文類聚』(『國文學研究資料文庫』影印寛文本)には白居易「琵琶行」を續集卷二十二樂器部に収録しているが、「長恨歌」を収録していないからである。さらに、「滿座陽地僻無音樂」一句には「地僻、事文作小處、文集亦同」と、「滿座聞之皆掩泣」一句には「事文作重聞、文集亦如此」と注しており、羅山が元和四年以降、那波本の異文と一緒に書き入れたと思われる。林鷺峰『西風淚露』には、羅山の『事文類聚』の受容について、次のように述べている。

先考少年好讀『事文類聚』、壯年得朝鮮本、全部加朱句畢。鮮本罹災、其舊唐本余傳之。

(先考は少年好んで『事文類聚』を讀み、壯年朝鮮本を得、全部朱句を加えて畢る。鮮本は災に罹り、其の舊き唐本は、余之を傳う。)元和四年の羅山は三十六歳であり、まさに「壯年」の一語に相応する。ここに言及される壯年に入手した朝鮮本『事文類聚』は、『歌行露雪』

に加えた『事文類聚』異文の来源であろう。また、「鮮本罹災」は、明暦の大火に焼失したことを指していると思われる。

以上によれば、幼少期の羅山が慶長元年（1596）から『歌行露雪』の典拠を注記した後、数年に亘って修訂しており、彼の學問への

慎重な態度を反映している。さらに、中年期に入った羅山は手元にあ

る那波本『白氏文集』や朝鮮本『事文類聚』などを利用して『歌行露雪』の異文を注記したが、これは彼の『白氏文集』本文への關心を表しているよう。

表四 『歌行露雪』・東博本異文注表

那波本	『歌行露雪』・異文注	『古文真寶』	長恨歌	
			金澤本	東博本異文注
御宇多年求不得	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○寓○○○○○	宇、乍寓。
養在深閨人未識	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○窓○○○	閨、窓イ。
回眸一笑百媚生	○頭○○○○○ 頭字、文集作眸。	○頭○○○○○	○○○○○○○	（無し。）
承歡侍宴無閒暇	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○寢○○○	宴、寢イ。
君王掩面救不得	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○眼○○○	面、眼イ。
夜雨聞鈴腸斷聲	○○○○○○○○ 鈴、或作猿。	○○○○○○○○	○○○猿○○○	（無し。）
春風桃李花開夜	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○日	夜、月イ。
西宮南苑多秋草	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○内○○○	苑、内イ。
宮葉滿階紅不掃	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○	宮、落イ。
椒房阿監青娥老	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○ （胡粉で塗抹して「落」に作る。）	娥、蛾イ。
遲遲鐘鼓初長夜	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○漏○○○	鼓、漏。
翡翠衾寒誰與共	○○○○○○○○	○○○○○○○○	舊枕故衾○○○	翡翠衾寒、舊枕故衾。
排空馭氣奔如電	○風○○○○○ 風、文集作空。	○風○○○○○	○○○○○○○	（無し。）

		那波本		『歌行露雪』・異文注		『古文真寶』		金澤本		東博本異文注	
似訴平生不得意	○○○○○○○志	○○○○○○○志	○○○○○○○志	○○○○○○○志	○○○○○○○志	○○○○○○○志	○○○○○○○志	○○○○○○○志	○○○○○○○志	(無し。)	
尋聲闇問彈者誰	○○暗○○○○○ 暗、文集作闇。	○○暗○○○○○	○○暗○○○○○	○○暗○○○○○	○○暗○○○○○	○○暗○○○○○	○○暗○○○○○	○○暗○○○○○	(無し。)	(無し。)	
楓葉荻花秋索索	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○瑟瑟	索索、瑟瑟イ。半紅半白之兒。		
本長安倡女	(序無し。)	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	本、是イ。 倡、家イ。		
送客溢浦口	(序無し。)	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	客、至イ。		
元和十年	元和十五年秋 文集無秋字。	元和十年	元和十年	元和十年	元和十年	元和十年	元和十年	元和十年	十、五イ。 年、秋イ。		
琵琶行											
此恨綿綿無盡期	○○○○○○○絶	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	絶、絶イ。		
但令心似金鈿堅	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	(無し。)		
釵留一股合一扇	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	股、イ乍鈿。		
唯將舊物表深情	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	唯、空イ、持イ。		
回頭下望人寰處	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	望、視イ。		
昭陽殿里恩愛絶	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	絶、歇イ。		
雲鬢半重新睡覺	○○○○○○○偏、文集作垂。	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	(無し。)		
九華帳裏夢中驚	○○○○○○○魂、文集作中。	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	中、魂イ。		
中有一人字玉真	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	字、名イ。		
樓閣玲瓏五雲起	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	閣、殿イ。		
山在虛無縹緲間	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	縹、眇イ。		

前述のように、『歌行露雪』には『箋解』や『三體詩』を用いて注記する所が数多く存在しており、当時の読書風潮、とりわけ禅林の風潮を反映している。それに對し、東博本「長恨歌」「琵琶行」には『箋解』や『三體詩』を引用する例は全く見當たらなく、『唐詩解』を引用するのみである。『唐詩解』は明の唐汝詢の編纂であり、早期の版本には、萬曆四十三年（1615）楊鶴刻本（『四庫全書存目叢書』本）がある。羅山が當時讀んでいた『唐詩解』は、明国から輸入した唐本であろう。

羅山が東博本を注記した際に、金澤本を参照したことが従来の研究によってすでに明らかにされているが、金沢本と異なる所も相當見られる。表五の「九華帳裏夢中驚」「楓葉荻花秋索索」「幽咽泉流水下灘」三句はその例であり、『唐詩解』によって注記したものであろう。『唐

詩解』卷二〇には、白居易「琵琶行」「長恨歌」二首を収録している。その本文来源について、「全集本とは別個に流布した單行本系のテキストではないか」と神鷹徳治氏が推測しているが、『唐詩解』の「凡例」には、

諸家詩散佚汗漫、延禮之選、已無遺珠。故是編悉掇『品彙』之英、不復外索。雖盛唐諸公、間有一二參入、而中晚及初、一無采焉。至若白香山之「長恨歌」、搜之本集、然亦寥寥無幾矣。

と見え、『唐詩解』が収録している「長恨歌」は、某本「本集」（『白氏文集』）から採録されることが分かる。羅山が『唐詩解』によって那波本を注記したことは、『唐詩解』本文の特別な價值に注意したあらかもしれない。

表五 東博本注記・金澤本・『唐詩解』異文対照

那波本	金澤本	長恨歌	『唐詩解』	東博本注記
御宇多年求不得	○寓○○○○○	○十○○○○		宇、乍寓。
養在深閨人未識	○○○窓○○○	○○○○○不○		閨、窓イ。
回眸一笑百媚生	○○○○○○○	○○○○○○○		(無し。)
承歡侍宴無閒暇	○○○寢○○○	○○○寢○○○		宴、寢イ。
君王掩面救不得	○○○眼○○○	○○○○○○○		面、眼イ。
夜雨聞鈴腸斷聲	○○○猿○○○	○○○○○○○		(無し。)
春風桃李花開夜	○○○○○○○日	○○○○○○○日		夜、月イ。

那波本	金澤本	『唐詩解』	東博本注記
似訴平生不得意	○○○○○	○○○○○志	(無し。)
輕攏慢捻抹復挑	○○○○○	○○○○○撥	(無し。)
初為霓裳後綠腰	○○○○○	○○○○○六么	
嘈嘈切切錯雜彈	○○竊竊○○○	○○○○○	切切、作竊竊。
幽咽泉流水下灘	○○○○○難	○○○○○水	水、作水。 灘、作難。
銀瓶乍破水漿迸	○○○○○	○○○○○	乍、作閉。
曲罷曾教善才伏	○○○○○	○○○○○服	(無し。)
繞船明月江水寒	○○○○○	○○○○○明月	(無し。)
相逢何必曾相識	○悲○○○○○	○○○○○	逢、悲イ。
潯陽小處無音樂	○○○○○	○○○○○地僻	(無し。)
住近湓江地低濕	○○○○○	○○○○○底	(無し。)
杜鵑啼血猿哀鳴	○○○○○哭	○○○○○	血、哭イ。
嘔啞嘲晰難為聽	○○○○○	○○○○○	(無し。)
滿座重聞皆掩泣	○○○○○	○○○○○聞之	(無し。)

むすびとして

以上、内閣文庫に所蔵される林羅山手抄の『歌行露雪』について考察した。『歌行露雪』の内容は、禪僧の英甫永雄から深い影響を受けたが、「宣賢抄」によって典拠を注記した部分も時に見られた。それらの注記は、永雄の講義から聞いたものか、自ら「宣賢抄」から写したもののか、明らかにし難いが、羅山の學問は早くから禪林と博士家との二系統の内容を含んでいたことが窺える。

『歌行露雪』原書は慶長元年（1596）に成立したものである。しかし、慶長六年（1601）以降、羅山によって書き添えられた内容も相當存在している。特に那波本『白氏文集』によって異文を注記する部分が確認でき、さらに羅山手抄の東博本を加えて考察してみたところ、中期の羅山が『白氏文集』の本文に深い関心を示していたことが分かる。

注

- (1) 小論が所引する『倒痴集』は、『室町ごころ…中世文學資料集』(角川書店、一九七八)に収録されている翻刻に従う。その翻刻は建仁寺兩足院所蔵本を底本に用い、東京大學史料編纂所所蔵本で校訂するものである。
- (2) 佗力は洛下他力に作る。門下之家は門下に作る。少年は好少年に作る。東山は東面に作る。遊於は遊に作る。孔丘之治学は孔丘治学に作る。茲冬之仲は茲冬仲に作る。以見示予は見示子に作る。開而、二字無し。和尚之講席は和尚講席に作る。反相は又相に作り、誤りである。幻術は幻術等に作る。各無所欠は一一無所欠に作る。現手は顯手に作る。予之所講は予所講に作る。可謂異曲同工は異曲而同工に作る。「戯賦」の上、「不孰稱美之」の一文ある。褒罵は褒之に作る。
- (3) 「この詩と長い詞書とがそのまま、内閣文庫蔵『歌行露雪』に英甫自筆で綴じ込まれている」と堀川貴司氏が断定する(堀川貴司『倒痴集』について、『論集…中世の文學(韻文篇)』、久保田淳編、明治書院、一九九四、頁三四七)。
- (4) 伊藤東慎「狂歌師雄長老と若狭の五山禪僧」、『禪文化研究所紀要』三、一九七一。
- (5) しかしながら、鈴木健一氏が「文禄四年」の条に、「英甫永雄の許へ行き、藏書を閲覧した」と記載しているのみ(鈴木健一『林羅山年譜稿』、ペリカン社、一九九九、頁一一)。
- (6) 堀勇雄『林羅山』(吉川弘文館、一九九〇、頁二〇)・鈴木健一『林羅山年譜稿』(頁一二)を参照する。
- (7) 『水心集』(『四部叢刊』本)巻二五「宋殿父墓誌銘」、「家居或盡一史、露抄雪纂、踰月不出門」。
- (8) 蔭木英雄・浜田啓介『倒痴集』解題、『室町ごころ…中世文學資料集』頁五六〇。
- (9) 『古文真寶』などの刊本系所収の「琵琶引」は「楓葉荻花秋索索」に作るが、金澤本は「楓葉荻花秋瑟瑟」に作る。英甫永雄の作品(⑧⑩)には「索索」「瑟瑟」の使用とも見られ、彼が讀んだ『白氏文集』には抄本系のものがあったと考えられる。
- (10) 芳賀幸四郎『中世禪林の学問および文學に関する研究』、思文閣出版、一九八一。
- (11) 蔭木英雄「五山文學における白居易の受容」(『白居易研究講座(第四卷)…日本における受容(散文篇)』、勉誠社、一九九四、頁二八二)、または、太田次男「白居易と道林禪師との問答について」(成田山仏教研究所紀要)、第一四号、一九九一)を参照されたい。

- (12) 柳田征司「抄物目録稿(原典漢籍集類の部)」(『訓点語と訓点資料』、二〇〇四年第九期)を参照する。
- (13) 小論は引用する京大本は、國田百合子『長恨歌・琵琶行抄』(武蔵野書院、一九七六)所収の影印本・京都大學圖書館が公開する「長恨歌並琵琶行秘抄」画像に従う。
- (14) 大塚光信「長恨歌・琵琶行抄」解題、『室町ごころ…中世文學資料集』、頁五八九。
- (15) 安野博之「清原宣賢自筆『長恨歌・琵琶行抄』の成立」、『国語と国文学』、二〇〇三年第一二期。
- (16) 安野博之「清原宣賢自筆『長恨歌・琵琶行抄』の成立」。
- (17) 小論は引用する龍門本は『阪本龍門文庫複製叢刊』本(龍門文庫、一九六二)に従う。
- (18) 今中寛司『近世日本政治思想の成立…惺窩学与羅山学』、創文社、一九七二、頁一六二。
- (19) 堀川貴司『倒痴集』について、頁三五〇。
- (20) 『歌行詩』は「室町末期の写、慶長・元和間の古活字、寛永・慶安間の付調整板本等が存する」(神鷹徳治『歌行詩解題』、勉誠社、一九八八、頁四)。
- (21) 川瀬一馬「清原宣賢筆『長恨歌并琵琶行』解説」、『長恨歌并琵琶行二卷』、清原宣賢筆、白居易作、龍門文庫、一九六二、頁五。
- (22) 川瀬一馬「清原宣賢筆『長恨歌并琵琶行』解説」(頁六)。
- (23) 國田百合子『長恨歌・琵琶行抄』、頁二四。
- (24) 近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』、頁一三一—一三二。
- (25) 『和刻本中國古逸書叢刊』第一卷、金程宇編、鳳凰出版社、二〇一一。
- (26) 金澤本『白氏文集』には胡粉を用いて塗抹する内容があり、括弧で本来の文字を示す。
- (27) 安野博之「清原宣賢自筆『長恨歌・琵琶行抄』の成立」。
- (28) 服部宇之吉氏校訂『増註三體詩』、富山房、一九七二。また、『唐詩選三體詩総合索引』(禪文化研究所編、一九九二)を参照する。
- (29) 近藤春雄『林羅山年譜稿』、頁一一。
- (30) 近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』、頁一三七。
- (31) 例えば、「云鬟花顔、金步搖」には「句解、髮髮如雲、容貞如花、戴金步搖之冠、「春從春遊夜夜夜」には「句解、春則隨帝遊觀、夜則專房」とある。
- (32) 東博本巻二・巻七一の羅山の手記は現存していないが、その影寫本は九州大學の麻生文庫に保存されており、後に慶應義塾大學の斯道文庫に寄託されている。神田喜一郎氏によれば、巻二の手記には、「道円が自分で

林羅山『歌行露雪』について

京都から江戸までこの新印の白氏文集を持ってきてくれたので、公務の暇に読むに随うて朱で句読をつけてゆくが、今日はその筆下しの日である。「その日は元和四年七月二十一日」とある（神田喜一郎「林羅山手校の白氏文集」、『東京国立博物館研究誌』、東京国立博物館、一九五八年第一期、頁一二）。

(33) 村上雅孝「東京国立博物館蔵白氏文集林羅山点」（『東北大学文学部研究年報』、一九九三、頁一三〇）。

(34) 村上雅孝「東京国立博物館蔵白氏文集林羅山点」（頁一四七）。

(35) 神鷹徳治『源氏物語』と『唐詩解』、『アジア遊学』、第一一六期、二〇〇八、頁六七。

（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員）